

新 生

令和六年九月 十日印刷
令和六年九月二十日発行



東北新生園入所者自治会

新生第七十六巻 第三号

新 生

令和六年九月 十日印刷
令和六年九月二十日発行

第七十六巻第三号

東北新生園の概況

所在地	宮城県登米市迫町新田字上葉ノ木沢1番地
土地面積	351,291㎡
建物延面積	22,740㎡
開 園	昭和14年10月27日
医療法承認病床	185床
標榜診療科	内科、外科、皮膚科、眼科、耳鼻いんこう科、歯科
現在入所者数	男7名 女18名 計25名
職員定員数	130名（令和6年4月1日現在）
園 長	医学博士 横 田 隆

東北新生園交通案内図



夏祭り

— 令和6年8月1日 —



水ヨーヨー釣り



千本くじ引き



ボーリング



アヒルすくい



左から事務長、総看護師長、副園長、園長



入所者・職員のたくさんの参加でとても賑わいました。

園内日誌

令和六年 四月～六月

九～十二日 《四月》 観桜会行事（抽選会）

三十日 《五月》 熱気球係留搭乗体験

二十日 《六月》 らい予防法による被害の名誉回復及び追悼の日

【謝寄贈図書欄】

令和六年 四月～六月（敬称略）

多 磨 岡 山 県 邑 久 光 明 園	青 松 香 川 県 大 島 青 松 園	愛 生 岡 山 県 長 島 愛 生 園	始 良 野 鹿 児 島 県 星 塚 敬 愛 園	ハ ン セ ン 病 問 題 か ら 平 和 を 考 え る	手 を つ な ぎ と も に 生 き る 社 会 へ	沖 縄 県 沖 縄 愛 楽 園	深 海 に 生 き る 魚 族 の よ う に	鳥 取 県 今 井 出 版	荒 井 玲 子
---------------------	---------------------	---------------------	-------------------------	-------------------------------	-----------------------------	-----------------	-------------------------	---------------	---------

令和6年9月10日 印刷
令和6年9月20日 発行

発
編
印

行
集
刷

東北新生園楓会(自治会)
楓 会 文 化 部
川 内 印 刷 株 式 会 社

〒989-4601

宮城県登米市迫町新田字上葉ノ木沢一

東北新生園 電話 0228 (38) 2121(代)
発行所 東北新生園入所者自治会 電話 0228 (38) 3600



新生・第七十六卷第三号……………目次

表紙：「彼岸花」……………撮影 医療社会事業専門職 瀬川 将広

宜しくお願い致します……………看護師 小澤 知美……………(2)
はじめまして……………看護師 高橋 朱里……………(4)
ヒッチハイク……………作業療法主任 羽賀 登美子……………(6)
随筆「那須の黒毛和牛が食べたくて」……………斎藤 照雄……………(8)

|| 新生文芸 ||

詩……………選者 佐々木 洋……………(11)
短歌……………選者 皆川 二郎……………(14)
俳句……………選者 小松 温美……………(16)
川柳……………選者 栗石 隆子……………(18)
東北新生園学習見学会を行いました……………看護助手 熊谷 信裕……………(20)
宮城の名産・特産……………事務助手 遊佐 三枝子……………(25)
四コマ漫画「ある・なしクイズ」「たまご競走」……………太田 凜……………(28)
園内日誌・謝寄贈図書

宜しくお願い致します。

看護師 小澤 知 美

令和五年十一月より、第一病棟にて勤務させて頂いております。看護師の小澤知美と申します。私は、福島県出身です。

私の好きな詩をここで紹介させて頂きま

「雨ニモマケズ」

宮沢 賢治

雨ニモマケズ
風ニモマケズ
雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ
丈夫ナカラダヲモチ
慾ハナク
決シテ瞋ラズ

イツモシヅカニワラッテキル

一日ニ玄米四合ト

味噌ト少シノ野菜ヲタベ

アラユルコトヲ

ジブンヲカンジョウニ入レズニ

ヨクミキキシワカリ

ソシテワスレズ

野原ノ松ノ林ノ蔭ノ

小サナ萱ヅキノ小屋ニキテ

東ニ病氣ノコドモアレバ

行ッテ看病シテヤリ

西ニツカレタ母アレバ

行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ

南ニ死ニサウナ人アレバ

行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ

北ニケンクワヤソシヨウガアレバ

ツマラナイカラヤメロトイヒ

ヒドリノトキハナミダヲナガシ

サムサノナツハオロオロアルキ

ミンナニデクノボートヨバレ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイフモノニ

ワタシハナリタイ

この「雨ニモマケズ」は有名な詩ですが、もともとは無題でした。宮沢賢治が死の二年前に書き残していたものを、死後に弟の清六が遺品整理をしていて発見したというのです。

賢治の生前に発表された作品は少ないと言われていますが、賢治の残した詩や童話といった作品は膨大な数にのびります。賢治は現在の岩手県花巻市に兄弟五人の長男として生まれ、岩手県の土壌の研究、東京での法華経の普及活動、花巻農業高等学校の教員地質学の知識を活かして農業の指導を精力的に行うなど、三十七年という短い生涯の中で密度

の濃い生き方をしました。

二〇一一年三月十一日、東日本大震災が起こり、津波により未曾有の災害に見舞われ、大勢の方々の尊い命が奪われました。

人は誰しも明日生きている保障はありません。震災を経験し、生きていることが奇跡であることに気づくことができました。生かされていることに対する感謝の気持ちをもち、賢治のように毎日に想いを込めて生きることが今もできております。

まだまだ不慣れでご迷惑をおかけすると思いますが、先輩方にご指導を頂きながら精進して参りますので、どうぞ宜しくお願い致します。

はじめまして

看護師 高橋 朱里

令和五年十二月から東北新生園第一病棟に配属となっています、高橋朱里と申します。出身地は、東北新生園がある宮城県のお隣の岩手県一関市です。私の地元には日本百景に選ばれた猊鼻溪という観光名所があります。百メートルもの壁岩の合間に砂鉄川という名前の川が流れており、そこを舟で下ることができます。春は桜や藤の花が咲き乱れ、夏はみずみずしい緑に包まれます。秋には木々が紅葉し、その鮮やかな色彩が水面に映り趣があります。新緑の時期にはお茶をいただける「お茶会舟」や中秋の名月を楽しむ「お月見舟」など優雅な季節限定の舟も運航されています。

ます。また雪化粧に覆われる冬には、まるで水墨画のような風景を、屋根付きこたつ舟で釜飯や鍋を食べながら楽しむことも出来ます。地元の中学校は、毎年卒業生が屋根付きこたつ舟に乗り鍋を食べることが恒例行事でした。舟には何度か乗ったことはありましたが、こたつに入りながらの温かい鍋が格別だったなあと思い出に残っています。皆様も岩手県に足を運ぶ機会がありましたら、是非お立ち寄り下さい。鮎の塩焼きもあるのでは非。つい、地元のPRをしてしまいました。さて、話は変わりますが、去年の十二月より第一病棟に配属され七カ月が経ちます。この七カ月はあつという間でした。毎日仕事を覚えるのに必死で「今日こそ帰ったら絶対勉強しよう、するぞっ。」と意気込んで帰るものの、子ども達を寝かせてしまったら最後。気づいたら朝になっています。朝起きる度に、「また寝てしまったー」と寝たことを

後悔、反省する毎日です…。

私には二人の娘がいます。上の子は小学校二年生、下の子は年中です。女の子って静かと勝手に思っていた私でしたが、想像とは真逆でとても騒がしく予期しないことを毎度される度に驚きと怒りと笑いの毎日であります。テレビで観たことがある、子どもが紙に絵を描いていたところ、少し目を離したら壁に落書きされちゃった…なんていうことも、「こういうことってテレビの中だけでしょーう」なんて思っていました。実際にやられたことがあり、本当にあるんだ…と。ただ、書かれてしまったのが覚えてたのひらがなの名前だったので怒る気になくなったのを覚えています。そんな子どもたちでしたが、何かと「ママ、ママ。」と言っていたのが、最近は「パパ、パパ。」に変わり、少し寂しさを感じるのと同時に、「ちよつと怒りすぎなのかな…」と反省する日々です。「子どもの成長はあつという間だよ」という話をよ

く聞きます。思い返せば、子どもが生まれてから今日まで、あつという間だった気がします。慌ただしい毎日の中で、子どものちよつとした成長に気づけていなかったのを反省すると共に、心に余裕を持つことが目標です。(笑)私のつたない話を聞いていただきありがとうございます。

仕事では、先輩方から沢山ご指導をいただきながら日々勉強させていただいて感謝しております。入所者の方々が安心・安楽な生活が送られるようサポートさせていただきたいと思ひます。どうぞ宜しくお願ひ致します。

熱気球係留搭乗体験

— 令和6年5月30日 —



1年ぶりの開催。しんせい茶房からはホットコーヒー・ポカリスエット・冷やし麦茶・りんごジュースなど提供し、水分補給しながら楽しみました。



気球から見た園内風景。今年3月に完成した三重の塔も見えますよ

ヒッチハイク

作業療法主任 羽賀 登美子

東北本線の小牛田以北は終日運休が突然やってくる。初夏の夕、雨上がり青空のもと、梅ヶ沢駅の電光掲示板に「終日運休」との知らせが何の遠慮もなく光っている。瀬峰・小牛田間は折り返し運転をしているとのこと。瀬峰駅まで歩くことにする。

葉ノ木沢踏切を越え瀬峰への急な坂道を登る。この道は初めて通る。途中の山の雑木林が大きく切られ以前より明るくなったとのこと。とはいえ人家はなく謎の小さな鳥居くらいしか人の気配がしない。やっと下り坂にさしかかり、人家がポツリポツリと見えてくる。しかしまだ見慣れた線路や幹線道路は見

えてこない。

夕暮れで少し不安を感じながらも歩く。見知らぬ道は長い。依然として山中の風景が続き、人家も増えない。逆になくなってきたような気もする。車も通らない。暗くなってきた。どうする。人はいなくてもクマはいる、かも。不安が波のように押し寄せる。そしてシャツと振り返り手を上げる。

車が走ってきたのである。聞き慣れたエンジン音とライトの光。それから親切な女性に乘せてもらい瀬峰まで送って頂いた。ちよつと驚いていた。結果としては、たった数百メートル我慢すればよかったのだが、不安には勝てなかった。人生初のヒッチハイクである。

「那須の黒毛和牛が食べたくて」

斎藤 照雄

築館インターから郡山、猪苗代湖、裏磐梯を通り鶴ヶ城を見学して、下後で昼食をとり弟のEさん、(なぜ「さん」付けて呼んだかは、ハ氏となり何かにもすべてお世話になり、いつしか「さん」付けて呼んでいた)

その妻のKさん、その間に授かった甥のTさん、そして私で食事をとり、デザートを頼張り、しばし休憩。

下後町へ南下しKさんが「あ、バスツアーでここへ来たことある。ここを入っていくと茅葺屋根の家が沢山あって見事だった」

右手の小高い丘の雑木林がお茶工場に。その前には藤屋雑貨の二階がコンパクトなベージュ、左手には文房具屋の二階がコンパクトなピンク。そして前方にコンパクトなベージュの学校。今は二十五人ほどの生徒だとTさんが言った。昔は二階建の大きな学校で、ここが本校で分校を二つ抱えていた。多い時で八百人もの生徒がいた。

その裏を通り田園地帯へ。遙か向こうに我家が見えた。ピンクが若い人達、ベージュがおじいちゃん、おばあちゃん。

パパが「ただいま」と言うと、ママと子供達が「パパ、じいちゃん、ばあちゃん、お帰り。おじいちゃん、いらっしやい。」と出迎える。

パパが「お兄ちゃんたちが風呂へ入っている間にサッカーをしよう」と子供たちを誘って、しばらくボールを蹴っていた。

ママが「T、Y、風呂にお入り。ママは後

「俺も見た」

「俺も見た」

「俺も見た」

と男三人がテレビで見たと。葱一本で蕎麦を食べている様子は滑稽だった。

そして、下後町を下り塩原太助で有名な塩原温泉に。塩原太助とは江戸時代の豪商の名だそう。

そして、いよいよ那須。黒毛和牛の売り場へ来た。どっさり黒毛和牛を買って栃木を後にした。

茨城に入り、花室神社の脇を通り、しばし南下。

橋を渡る右手西方向にばあちゃんの実家がある。よくここへ来て泊まった。

橋を渡った左手には米屋さん。代々受け継がれている。

から入るから。」と言って、皆風呂に入りさっぱりした。

それから弟の音頭で、パパと子供らはジュース、あとの人たちはビールで乾杯。

私の帰郷を祝福してくれた。

ママは黒毛和牛を焼いてきて「お兄ちゃんどうぞ」と。「いや、子供達からやってくれ」

子供達が頼張り、みんなも頼張った。

後はご飯を少々食べて、デザートを頼張った後に子供たちは腹いっぱいになったようで八時半には先に床に就き、じいちゃんのEさんも隠居に帰っていった。

ママは食事の後始末。Kさんは私に目薬をして薬を飲ませた後、隠居へ帰っていった。

あとの三人でしばし会話。いろいろ話し合い九時過ぎにパパママは別室の床に就き、私もまた別室で床に就いた。

翌朝、私は五時に起床。Kさんも私のとこ

ろへ来てお茶をたててくれた。子供達も早起きしてジュースを飲んだり、せんべいを食べていた。

ママは朝食の準備、EさんTさんも間もなく起きて来てお茶を飲んでいた。

そして七時半頃に朝食をとった。

九時半ころEさんと、にゃんこ、わんこを留守番にして私を送ってくれた。

那須で、私がいる新生園の明峰寮の寮友達等にお土産を買った。

長者原で昼食をとり、そこで我が故郷の家族らに御土産を買った。

新生園に戻り、明峰寮へ入り、ただいまと挨拶をして寮友達等に御土産を渡した。

新生文芸

詩

佐々木 洋 一 選

◇ 入 選 ◇

《花よりも美しい幸せ》

芽

生

乾いた大地に水が還る

透き通る霧雨の中に掛かる虹

揺れて光を弾く

葉っぱを転がり落ちる雫

色褪せていた緑が瑞々しさを
取り戻す瞬間

来年もきれいに咲いてね
誰にともなく呟いたささやき

たくさんのお花が咲くとき
たくさん笑顔が集まる
さざ波のように皆の心に
広がる幸福感

きれいに咲いてね
来年もまた咲いてね
柔らかな形のない祈り

空を覆った夕立の雲
過ぎ去った後に輝く一番星

明日もきつと青空は広がり
花は咲く

小さな笑顔もたくさん集めて
皆が幸せになれる明日へ向かって
今日を精一杯生きて行こう

あなたが笑ってくれるとき
私は世界中で誰よりも
幸せを感じているから

【選 評】

《花よりも美しい幸せ》

芽

生

幸せを花にたとえることはよくあることです
が、作者の前向きな気持ちから立ち上がった新鮮
な言葉は、より幸せ感を助長し、作者独自のさわ

【選 評】

《転機》

石 川 優 美

何か落ち込んだり、何も良いことがないといっ
た日常であっても、自然体で「転機」が訪れるタ
イミングを待っている。「転機」をきっかけとして、
新しい展望が開ける。そんな期待感をうまく表現
しています。また、凝縮された言葉は的確で、題
と内容がよくマッチしています。

やかな世界を演出しています。
ポジティブになれる「花よりも美しい作品」で
はないでしょうか。

◇ 入 選 ◇

《転機》

石 川 優 美

その時が来たら
迷わず変わるタイミングがある
今もがくこと無く
その時を待とうという気持ちになる
どんなタイミングなのか
楽しみにさえなってくる
何がきっかけになってくるのか
そつと耳を傾ける
どんな季節の訪れなのか
まだ見えない行き先へ
信じる物を確認する作業が始まる



短歌

皆川二郎選

◇入選◇

台風が近づき悩む雨漏りの奏でる音色 芽生
不眠を誘う

【選評】

台風が季節がやって来ると雨漏りのことが気になり、その雨漏りの奏でる音が不眠を誘う。という雨漏りに対する作者の心配と、その雨漏りの奏でるような音が不眠も誘うという作者の二重の心配が実感として感じられる。

風渡り睡蓮の花縫いて行くアメンボ知らぬ 芽生
幼児の笑み

【選評】

風が渡り、睡蓮の花を縫うように行くアメンボを見ている幼児の笑みをアメンボは知らない。という情景を作者はじっと見ているのである。睡蓮とアメンボ、それを見ている幼児、更にそれを見ている作者との微笑ましい姿が見えるようである。

カエル鳴き通り過ぎ行く大人たち過ぎ去りし日に最早戻れず 大平尚拓

【選評】

梅雨時に蛙が鳴き、そこを過ぎ去ってゆく大人たちは、過ぎ去ってゆく日には最早戻ることはできない。という季節の移り変わりと、そこに生きて行く人たちの人生の一コマを表現しているようである。過ぎ去ってしまった日々には戻ることができないので、日々を大切に生きていかなければならないことを教えられるようである。

◇佳作◇

夏の池釈迦の歩みか睡蓮を見下ろす先 芽生
に衆生を見つむ
花暦雨に染まりて藍色に塗られ輝く紫
陽花の花



種子飛ばしスイカ食べては顔を向け頬 大平尚拓
ふくらませ友と競いき

俳句

小松温美選

◇入選◇

藤の花眺め猊鼻や舟下り

斎藤照雄

【選評】

猊鼻溪の景である。岩肌に絡むように咲く藤の花。舟はゆっくり下っていく。爽やかな景を描いて、作者の心持ちを想像できる。

赤とんぼ群れ行く先に夕陽落ち

芽

生

【選評】

誰もが以前観た夕陽の景色を眼前に思い浮かべ、懐かしい気持ちになる。「群れ行く先に」の措辞で、景に広がりも出た。

春祭り終われば故郷の野良忙し

斎藤照雄

【選評】

春祭は、農作業の始まる時季に豊作を祈って行うものが一般的。これが終われば、故郷はみなで農業に勤しむ

◇佳作◇

江合川上れば鳴子の栗団子

斎藤照雄

萩の花つつましやかに艶やかに

天竜の筏流しや岩躑躅

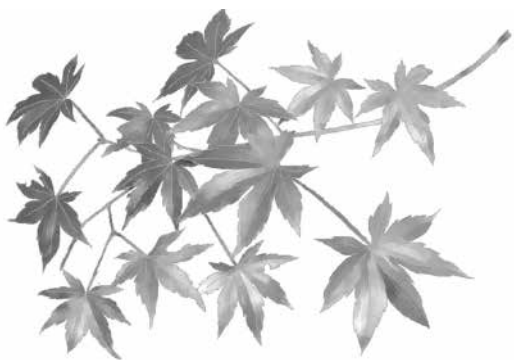
手土産にあの子の好きなメロン買う

湯上がりや冷えた麦茶も乙なもの

芽

生

あぜ道に花菖蒲は咲き香る
夕立後湿った風が過ぎて行く
鈴虫が夕餉に震え癒やされし
水菓子瑞々しさが旨い夏
敬老と言わぬが花よ気は若い



川柳

雫石隆子選

◇入選◇

《天位》

大平尚拓

先を見てどうなる我が身霧の中

【選評】

己が先は誰にも見えず、分からないが気になるもの。それを忌憚なく吐き出した秀句です。下五の「霧の中」も素晴らしい結句です。

《地位》

斎藤照雄

祈ります錆びた心が光るまで

【選評】

良い事が起きるように、と神仏に願うのが祈り。中七の措辞に「錆びた心」とあり、心痛の悩みがほどけるようにとの願いなのですね。下五の「光るまで」の比喩も素晴らしい。

《人位》

長沼蓮花

新メニユーつぎつぎ浮かぶ夏野菜

【選評】

酷暑の候、夏野菜も大きく育った夏。その中であれやこれメニユーを考える作者。女性ならではの感性が一句にあふれています。暑さもなんのそのですね

◇佳作◇

芽生

身を隠しそつと顔出すアマガエル
待ち焦がれ空梅雨睨むカエルかな
虹色の紫陽花揺らすアマガエル
密運ぶ蟻を見下ろすカエルかな

千歩

風鈴と夏のメロディ口遊む
初盆に祖父似の顔が笑い合い
故郷の見上げる空にブルーベリー

長沼蓮花

短冊に願い込めます想い人
ブルーベリー摘みが忙し青空の下
暑さにも負けじと回る扇風機

斎藤照雄

あばら家も住めば都だいいもんだ
なよなよと揺れる柳の悩ましき
肩並べ飲んだお方が気にかかる

大平尚拓

空き缶のつぶす力が足りなくて
仕事積み減らす先から重なるか



東北新生園学習見学会を行いました

看護助手 熊谷 信裕

厚生労働省が昨年十二月に行なった全国十八歳から九十九歳を対象としたハンセン病に関する意識調査アンケートによりますと、三十五・一％（回答のあった二万九一六人のうち）の人が未だに偏見や差別を持っていると回答しています。ハンセン病に対する認識は良い方向に向かっていると思っていました。が、未だにこのような認識の人が多くいることに驚かされました。最近ではニュースや新聞で報道されることが多くなってきたようです。が、正しい知識としては伝わっていないのかもしれません。

ハンセン病の歴史は古く、日本では「日本

が確立されたにもかかわらず法律を廃止しなかったことは大きな問題です。

これまで間違ったハンセン病対策のため、多くの方々は人権が侵害され非人道的な扱いをされてきました。ハンセン病問題の解決を図るため、国や地方自治体は回復者やその家族に対する偏見や差別の解消に向けて人権啓発や人権教育の施策を実施することが求められています。現在、国は各団体と一緒にシンポジウムを開催、正しい知識を持つってもらうためのパンフレットの配布、各種動画の配信（DVD、YouTubeなど）、毎年六月に「ハンセン病を正しく理解する週間」とするなどの活動をしています。地方自治体もパネル展などを企画しています。しかし、その認知度、参加者はほんの少しで、国民全体に知れ渡っているとは言えないのが現状です。厚生労働省は全国の中学校に「ハンセン病の向こう側」という名誉回復を目的としたパンフレッ

書紀（奈良時代七二〇年完成）」に記載されたのはじめてとされています。一九〇七年（明治四〇年）に「癩予防ニ関スル件」が制定されたことで療養所が造られ、一九三一年（昭和六年）に「癩予防法」が制定されると強制収容が進められるようになりました。特に「無らい県運動」によって強制収容に拍車がかかったと言えます。当時、この「無らい県運動」を疑問に思う方もいたものの、社会全体の考えに逆らうことができず、それに従ったというケースもあったようです。このような国の方針、社会の考えはハンセン病に対する偏見と差別を大きくしていきました。一九五三年（昭和二十八年）「らい予防法」に改正されましたが強制隔離の項目はそのまま残っており、一九九六年（平成八年）「らい予防法の廃止に関する法律」が制定されるまではそのままでの状態でした。間違った知識が広まったことをそのままにして、治療方法

トを配布していますが、授業の一環として扱われることは少なく、配布のみ、そのようなパンフレットがあることを知らなかったという先生もいる状態です。若い世代にはハンセン病の歴史と正しい知識を知っていただき二度と同じ間違いを繰り返さず、偏見、差別のない社会をつくっていくことが大切です。宮城県内には東北新生園の入所者の方々と交流がある宗教団体の方々や大学教授がいますが、その人たちがハンセン病問題に詳しい弁護士、労働組合などと一緒にハンセン病の正しい知識を広め、偏見や差別のない社会をつくることを目的とした「ハンセン病問題を考える市民のつどい・みやぎ」を運営しています。河北新報の記事を読んだ方もいらっしゃると思います。が、仙台市教育委員会の教員研修の際にハンセン病問題をテーマに毎年講義を行っています。今回は元入所者の家族も参加し、間違った政策のためにいじめを受けてい

たが、担任の勇気ある行動でいじめがなくなったという経験が紹介されました。講義を受けた教員のアンケートには「ハンセン病の歴史を初めて知った。」「教師が子供たちの模範となることの大切さを改めて感じた。」「

「教員として子供たちにハンセン病の歴史を伝え、考えさせる機会をしっかり作っていき

たい。」などが記されていたとのことでした。

東北新生園内には「ハンセン病問題を考える市民のつどい・みやぎ」と一緒に活動している方もおり、私も希望される個人をはじめ、県議会議員、市議会議員、各団体に対して東北新生園見学会を行ってきました。先日は全医労東北地方協議会青年部より依頼があり、二十九名の看護師、看護助手、事務職など医療に従事される方に対して学習、見学会を行いました。

はじめにさくらホールでハンセン病に関する学習を福祉室に準備していただいたDVD

ることを説明すると「そうですね。当たり前のことですよ。今もそのような状態かと思った。」と話す声がちらほら。御歌碑まで移動し貞明皇后様から賜った歌で、「そのように病者の友となつて慰めてください。お見舞いに行くことも難しいこの私に代わって」という意味の歌であること、入所者の方々にとって非常に大きな光の存在であったことを説明しました。その後は各教会、新生神社跡、施設の設備などを歩きながら説明、二班に分かれた上で、しんせい資料館（旧葉ノ木沢分校）に入り見学をしました。見たことのない自助具、装具、入所者が作った服や使っていた道具などを興味深く見ていました。かつて一般寮では自立生活していた方がいたが、現在では全員不自由者棟で生活していること、昔は大部屋での生活を余儀なくされていたこと、東北新生園の土地は入所者自ら整備しなければならぬ時代があったことなどを伝えまし

視聴で行ない、ハンセン病とその歴史を学んでいたいただきました。ほとんどの方がハンセン病のことを知らない人でしたが、全員が真剣に見ていたのが印象的でした。見学は最初に霊安堂で焼香をしてからスタートです。過去に一般寮で暮らしていた方は、全員不自由者棟で暮らすようになり、その不自由者棟は建て替えられ設備が整えられたこと、私が就職した当時は園内を歩く入所者の方が多かったこと、ゲートボールや野菜づくりなどを楽しんでいたことなどを歩きながら紹介しました。かつて入所者が自ら運営していた売店の跡地に新しく建立された慰霊塔を紹介し、正門の方向に向かいました。職員玄関に向かう坂にはかつて入所者の立ち入りを制限する境界線の土手があったこと、門は職員用、入所者用と別であったことを話すと参加者の表情が固まりました。近年はそのようなことはなく、バスや自動車で自由に出入りすることができ

た。また、互いに看護、介護、園内の整備などをしなければならなかったが、全国の入所者が生活改善のために立ち上がり「作業返還」が行われたこと、このような環境であっても祭りや野菜の品評会など様々なレクリエーションを行ない、楽しみ強く生きてきたことを説明すると、参加者はうなずきながら聞いていました。最も参加者が大きく反応したのが「火葬場跡」での説明でした。どのようなところでも昔はその地域で火葬するのは当たり前でしたが、一般では行政の火葬場を利用するのが当たり前になってからも、一九六八年ころまで東北新生園では入所者が寮友の火葬を行っていたことを伝え、と、「つい最近のことじゃないですか。」「自分の知っている人を自分の手で火葬するなんてショックでした。」という声が多く聞かれました。ゲートボール、野球、運動会などでは地域住民、職員との交流も行なわれ、夕方に

なると楽しむ声がかかれていたこと、東北新生園を会場としたゲートボール大会では入所者と職員のチームが優勝することも多かったことを説明しました。旧盲人会で一旦止まり、盲人会、各教会では定期的に集会が行われ、教会には外部の先生も来て交流が行われていた。現在は集会を新棟で行っているが集まれる方も少なくなっていること、各教会の保存を望む声もあるが全国的にも難しい問題になっていることを伝えました。過去には新生会館で地域の人たちと映画を観たり、園内行事としてカラオケ大会、収穫祭などが行われたり、睦ヶ池では大々的に花火大会が行われ、こちらも地域の人と一緒に楽しんでいたことを説明しました。

参加者のほとんどがハンセン病についてほとんど知らなかったということもあり、終了後に行われた質問、意見を話す場では「新しい知識を得ることができた」、「知人にも紹

宮城の名産・特産

事務助手 遊佐 三枝子

宮城の名産、特産。パツと思いつく物はありますか？

宮城Ⅱ牛タン・冷やし中華・萩の月・笹かま・・・。あとは？

でもちょっと待って、牛タンや笹かまは贈り物には選ぶけど、宮城県の人には「あまり」家庭では食べません。冷やし中華は夏の風物詩。萩の月も贈り物にはするけど、自分ではわざわざ買ってまで食べません。

では何が好きかというと、普通に海産物などの方が好みはあれど食べられているような気がします。新鮮なワカメは、よく味噌汁の具になっているし、牡蠣やホヤ、鮭に鰹、

介するのでこれからも見学会を続けてほしい」と嬉しい感想を述べてくれました。

ハンセン病の正しい知識を学ぶ機会は本当に少なく、このような見学会に参加していただいた方々も国民全体からすればほんの一握りで、啓蒙啓発活動としては焼け石に水かもしれない。しかしハンセン病とこのような時代を確かに生きてきた入所者の方々の存在を少しでも多くの方に知っていただき、同じ過ちを繰り返さない社会になることを祈りつつ、今後も見学会を続けていきたいと思います。

最後になりましたが、今回の見学会の企画に際しましては、楓会、東北新生園にご指導、ご協力いただきましたことを心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

秋刀魚。蛸に烏賊。同じ宮城県内でも、土地柄により特産品もまた様々です。

ここ登米市では、昔からよく庶民の間で食べられているのが『はっと汁』『油麩井』などでしょうか。

はっと汁は、一口に『はっと』と言っても各家庭や、お店で工夫を凝らし、郷土の味を守りつつも、今風に美味しさを追求された料理となっています。

十二月の始めには『はっとフェスティバル』が有り、宮城の名店や同志が集まり、実に一〇〇種類以上の『はっと』の屋台が所狭しと並び、人気のお店には長蛇の列ができるほどです。

毎年『はっと』を三杯食べると一回引けるクジに挑戦するも、原材料が小麦粉。何とか二回くらいクジを引きたくて六杯食べようとしても、朝ご飯を抜いても四杯が関の山。因みに当たりの商品は『はっと粉』や『ひとめ

ぼれ』などの宮城の特産品です。

『はっとフェスティバル』に並ぶのは、海産物を主とした『牡蠣はっと』や山菜を主とした『茸はっと』、野菜を主とした『かぼちゃはっと』や『あずきはっと』は汁物では無く、餅のように『はっと』を「かぼちゃ」や「あずき」で包んだ物になります。その他、某ラーメンチェーン店のキッチンカーも毎年参加しています。こちらは「はっと」のみならずラーメンも入っているのです、かなりボリュームがあり食べ応え有ります。

変わり種でいくとトマト味風の「イタリアンはっと」「カレーはっと」なんて物も。

仙台の大学生たちが作っている「チョコはっと」などは、子供たちの興味を引いて並んでいるのは若い方が多いようです。

一大イベントの『はっとフェスティバル』勿論それだけではありません。

ゆるキャラの『はっとん』は、公式で体重

が八トンあるとか、見た目に反してなかなかの重量です。

『はっと』をテーマにしたダンスや登米市内の小中学生のプラスバンドや、よさこいチームの演舞などもあり、寒い季節ながら、皆さん、心も体も温まるイベントです。

機会があれば友人知人を連れて、是非とも参加してほしいイベントの一つです。

もう一つ、登米市の名の知れた名物料理が『油麴井』です。

登米市名物の油麴は、煮物に汁物に何でもいけます。中でもやはり『油麴井』は、格別で、幼い頃からの家庭料理で、地元民は店で食えることが少なく、というか殆どの人が各家庭で食えるものという認識です。わざわざお金を出して食べには行かないし、自宅で慣れ親しんだ味の方が美味しいと言います。なのでお店に行くのは、もっぱら町外、県外の観光客の方です。

いろいろなお店で出している、この油麴井、元が麴だけあってヘルシー、なのに美味しい。ダイエット中にもお勧めの郷土料理。普通の麴とは違い、油麴自体に甘みがあり程よい出汁も出て旨味が増します。

郷土の特産品だけでなく、料理法なども色々工夫されており、油麴を使った唐揚げやクッキーなどのレシピも。

一度試しに食べてみたらハマること間違いなしです。

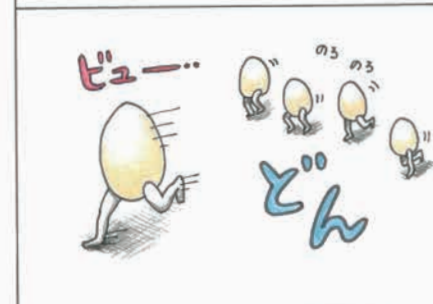
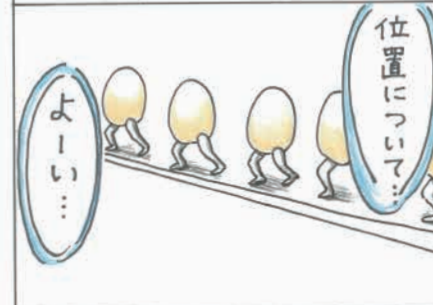
(個人の感想です。)



四コマまんが

作・太田 凜

たまご競走



※足がはやい＝傷みやすい

ある・なし クイズ

